

# 感性・創造の授業実践報告

－ 様々な素材体験が培う感じて考える力 －

江村 和彦

(日本福祉大学)

葉山 亮三

(名古屋芸術大学非常勤講師)

Class practice report of sensitivity, the creation

(Kazuhiko EMURA)

(Nihon Fukushi University)

(Ryozo HAYAMA)

(Nagoya University of Arts)

## 要約

本稿は教養教育科目である「感性・創造」の中の「素材と表現」の実践報告である。学修領域としての目標として掲げた、鑑賞する力、批評する力、表現する力を造形的観点から学ぶ方法を実践した。身の回りにある様々な素材体験を通じて制作し、作品を鑑賞することが、基礎教養科目ならではの主体的な学びにつながることを確認した。今後の造形専門教育の授業構想にもいくつかの示唆を得た。

## 1. 研究の目的

本研究は「感性・創造」の授業における授業実践の報告である。「素材と表現」というサブタイトルで始まった授業の15回の講義の中で、感性とは何かを考え、創造することへの興味関心を促す授業として、4つの実践を取り上げ、その具体的な実践のねらい、特徴、学生の反応などを報告する。学生自身が教員や社会人として必要な教養を身につけたり、その感覚を刺激するために、制作体験を通して考える機会とするために、授業の効果と問題について考察したい。

## 2. 感性・創造という科目について

愛知教育大学では、2012年に教養科目を改編しリテラシー(4分野)、基本概念、現代的課題、感性・創造の4学修領域に区分されている。感性・創造学修領域(Ld)は、いわゆる芸術作品に触れるにあたり、作者の意図、様式感、技法などを考察し、それらにまつわる知識や技術の習得を目指すことで総合的・批評的スキルを養うことを課題としている。

また、概要として「感性・創造とは事物や作品に触れ、それらに息づくものを感じ、解し、批評するという体験を重ねることで得られる知識や客観的視野を持って高めうる人間個々の総合的直観力の下地を担う両

輪であると定義づける。」とある。(新教養科目説明会【教員FD】・2013年5月22日配付資料)

つまり講義内容は、様々な体験を通じ自分自身で感じ、生成する感性や価値観について自己認識をする作業と他者のそれとの差異を見極め、客観的に見る力、批評する力を養う作業のふたつを同時に行うことを目標とする。一方では主観的に物事を捉え他者に伝える力をつけ、他方では客観的視野を持って直観力の下地をつくるという両義性をもつものであると認識した。

## 3. 具体的授業展開

### (1) 「素材と表現」のねらい

本授業は座学が基本であるため、感性についての一般論を述べることは出来ても、受講する学生一人一人の感性を刺激したり、創造性を養うには文章や言葉で伝えることには限度があると推測した。そこで、「素材と表現」という授業では、タイトル通り感性・創造における造形的観点から、素材を感じ、理解し、客観的視野を養うことを目標と定めた。その授業内容は、身近にある様々な素材を用いて、実際に手を動かし制作しながら、考えるものを目指した。具体的に体験する素材は、保育園、幼稚園での遊びや小中学校の図画工作、美術の授業などで取り組むものを選んだ。いろいろ

み、油粘土などの造形教材や石や木、土粘土などの自然素材、爪楊枝、発泡スチロールなどの人工的な素材、などである。それらの様々な素材を体験することで、これまでに獲得してきた知識や経験とつなぎ合わせながら、素材の特長を感じとり、他の素材との比較する力をつける。また制作体験を経て出来上がった作品を互いに鑑賞することで、他者との差異の認識力をつけ批評する力を身につけることを目的とした。

## (2) 方法と流れ

15回の授業の中で前半に講義と簡単な制作の説明の後、素材を配布し、各自作業を行う。1時間ほどで出来あがった作品を鑑賞し、リアクションペーパーによる振り返りを記述して終了するという流れを取った。体験する素材は紙、木、石、土、糸、発泡スチロールを取り上げた。素材は教員が準備し、木々などは授業中に採取することとした。道具ははさみ、のりなどは各自持参し、ヤスリなどは配布した。制作は教室内で行ったが、屋外での実践も取り入れた。

## 4. 授業実践報告

「素材と表現」の授業では様々な素材に触れて、実際に作業、制作をしていった。その中から4つの実践を取り上げる。

### (1) 両面おりがみのケルンモザイク

#### 1) 活動概要

ケルンモザイクとは、木製積木遊びのひとつで、和久洋三が考案した「童具(どうぐ)」のひとつである。三原色、三補色の基本色を中心に清色、濁色、無彩色を加えて色彩世界の秩序を遊びながら学ぶことができる。このおもちゃの構成遊びをヒントに、両面折り紙を用いて、色面構成遊びを実践した。

#### 2) 用意する物

両面おりがみ、はさみ、スティックのり

#### 3) 手順

- ①15cm四方の正方形に対角線を2本引いたA4サイズの紙を配布する。両面おりがみをひとり一枚選ぶ。
- ②同じく15cm四方の両面折り紙を半分に折りはさみで切って、分割した2枚のうち1枚を隣の学生のもので交換する。長方形の折り紙を2枚とも半分に切り4枚の正方形を縦横対角線に折り目を入れて切る。直角二等辺三角形の紙片を32枚つくる。
- ③分割した32枚で合計4色の直角三角形を組み合わせて、色面構成をする。
- ④制作のテーマは自由として、必ずタイトルをつけることとした。

#### 4) 結果

初めは32枚の紙片を並べることに戸惑っていたが、試行錯誤をしながら、風景のイメージやデザインのまとまりを見つけると、各々貼り付けていった。学生同

士話しながら、自分のイメージを固めていった。タイトルをつけるという行為も、学生にとって有効だったようだ。

出来上がってからタイトルをつける場合と、制作途中で浮かんだタイトルに近づけるように、構成を工夫する姿が見られた。「アクアリウム」「黄昏」のような風景の表現や「調和」や「輝き」(図1)のような抽象的な表現のタイトルの作品も見られた。この授業では、15cm四方の枠内に、32枚の紙片という限られた条件でさまざまなイメージをあらわすことができることを体験した。



図1「輝き」



図2「アクアリウム」



図3 「カラフルパニック」



図4 「対称性の破れ、そして絶句」

#### 5) 学生のコメント

##### 「アクアリウム」(図1)

・適当に並べてみて、いろいろな物が見えるのがおもしろかった。たくさんの組み合わせがあり、見え方や感じ方が人それぞれなので楽しいと思った。

##### 「対称性の破れ、そして絶句」(図4)

・最初はイメージを持っていたが、それがうまくいかなかった。人が模様に興味を見出そうとして、失敗する時に不快感を感じる不思議を体感したように思います。人が理解できないものに抱く恐れなのかと思いました。

・いきなり自由に表現させることなく、少しずつ自分の表現を身につけることができるのではないかと。

・最初はいろがみを適当に選びますが、その色を見比べてどんな模様をつくりたいか、選んだ色から想像を膨らませて何を表現しよう、と考えることはすごく感

性を刺激されました。

・切り紙もモザイクも、気が付けば対称になっていました。自分自身対称的な芸術が好きなのを初めて感じました。

・形に意味を持たせようとしたが、却って枠組みに押し込めてしまうことで可能性も失ってしまっているのだな、と感銘を受けました。自分の考えを改める、いいきっかけになったように思います。

## (2) 葉っぱのグラデーション

### 1) 活動概要

ランド・アートと呼ばれるジャンルの芸術家であるアンディ・ゴールズワージーの作品を参考に着想した。講義期間の中で11月という季節を選び、様々な落ち葉の採取できる条件のもと展開した。様々な落ち葉の色を見つけ、それらを並べてグラデーションをつくることで葉の色の多様さ、葉の種類による大きさ、形、質感などを感じる。また大人数でひとつの作品を作り出す協調性を育むことを目標とした。

### 2) 用意する物

カッターナイフ、身近な木の枝、新聞紙

### 3) 手順

- ①事前に用意した、10 cm～30 cmまでの木の枝を選びナイフでどちらか先端を鉛筆のように削って尖らせる。
- ②学生を緑、黄緑、黄、黄橙、橙、赤、赤茶、茶、の8グループに分けて、教室を出てキャンパス内にある様々な落ち葉の中から指定された色の葉を2, 3枚集めてくる。
- ③およそ15分後、それぞれ指定した色の葉を集めてきた。比較的柔らかい地面に、渦巻き状の線を枝で描き、はじめに緑を中心において、黄緑、黄色、橙、赤、茶の順にグラデーションになるように集めてきた葉を並べ、自分たちで削った枝で刺して固定して



いく。

図5 葉を順番に枝で刺していく

### 4) 結果

屋外に出て作業するということが、学生にとって新鮮だったようだ。各々が見つけてきた葉の形や色を改めて眺め観察していた。葉を拾う行為自体が久しぶりの学生がほとんどで、改めてその行為の重要性を感じている学生もいた。学生全員で行うことに共感する体験をした。



図6 葉っぱのグラデーション

#### 5) 学生のコメント

- ・大人気で協力しながら作り上げた授業だったと思う。この葉っぱの色は綺麗か、大きさはこれぐらいがいいかなど、みんながそれぞれ1つの作品を考えて作り上げたことがとても楽しかった。
- ・色のつながりを意識して落ち葉を並べることにより、バラバラの状態では感じなかった「まとまり」のようなものが生まれ、木についている状態の葉とはまた一味違った、自然の美しさを感じました。
- ・この葉のグラデーションは、落ち葉を拾い自然と触れ合うことで、生活科や理科と関係性があり、またみんなですべての作品を作るため、協調性を育むことができると思いました。

### (3) 爪楊枝で笑顔をつくる

#### 1) 活動概要

彫刻家葉山亮三氏の「楊枝のご用事」の展示から着想を得た。2人1組で爪楊枝を発泡スチロールに挿し、「えがお」を表現する。

#### 2) 用意する物

爪楊枝 150本、発泡スチロール (15x20cm)

#### 3) 手順

- ①二人一組に発泡スチロール板と爪楊枝を配る。
- ②制作の条件として、「えがお」をつくる。爪楊枝を全部使い切る。「えがお」の解釈は任せることとした。
- ③共同で制作したのち、完成した作品を全員で鑑賞した。

#### 4) 結果

はじめは爪楊枝の量に困惑していたが、個人制作ではなくふたりで作ることで、相談しながら制作してい

た。爪楊枝を挿す角度を工夫して、斜めから見えるように仕上げるなど、発泡スチロールを、多面的に捉えて「えがお」を作る姿が見られた。

#### 5) 学生のコメント

- ・爪楊枝を限られた空間の中で挿し込みイメージを形にするという作業が印象に残っているのは、自分が緻密な作業をしようと無意識に自分好みの作業になっていたからかもしれない。
- ・食後か試食のときにしか使わないと思っていた爪楊枝を作品の材料として使う非日常性に大きく驚かされ、妙な高揚感があった。

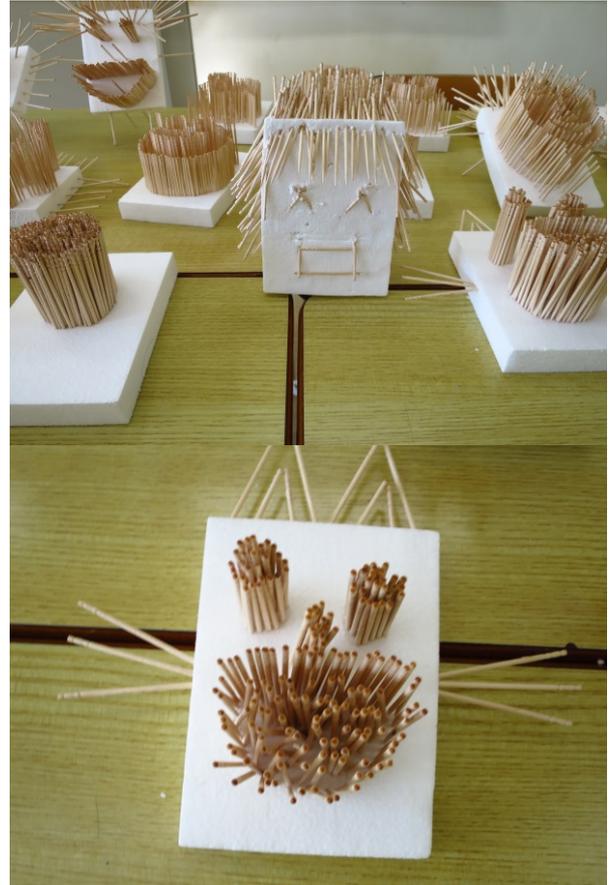


図7 さまざまな爪楊枝の「えがお」

図8 耳とひげをつけたえがお

### (4) 木を削る

#### 1) 活動概要

キャンパス内にある木々について、ナイフで削り、やすりをかけることで、視覚、嗅覚、触覚などで木の感触の変化を確かめる。

#### 2) 用意する物

身近な木の枝、カッターナイフ、新聞紙、紙やすり  
ひとり5cm四方1枚ずつ (#60、#120)

#### 3) 手順

- ①前の週に身近にある木々を選んで持ってくるように伝え、各自持参してきた枝をカッターナイフで削る作

業から始める。忘れたものは、あらかじめ用意した枝から選ぶ。

②カッターナイフで外皮を削り落とす。

③外皮が取れたところで、枝の両端のうち、片方を鉛筆のように先端を尖らせ、もう一端を丸く半球のように形づくる。

④紙やすりで削り（#60で荒削りをして、#120で仕上げ削りをする。）表面を滑らかに仕上げる。



図9 様々な削った形

図10 お互いの作品を鑑賞する



#### 4) 結果

普段通っている道の木々にどれだけ意識を向けているか。また名前を知らないまでも、葉の形の違いや季節ごとに色を変えていく広葉樹などに気を留めている人々がどれだけいるだろうか。選んだ木の枝を削りながら、やすりながら、その外側と内側の違いを視覚、触覚などから発見していく姿が見られた。また、鑑賞する時間を設けて互い枝を見ることで、枝そのものの違いを発見し、削る形の取り方や仕上げ方の違いなどに気付く姿が見られた。

#### 5) 学生のコメント

・木の枝を拾いそれを削ったのは生まれて初めてで、とても新鮮であり、鉛筆と違い固さが均一でないため

削りにくかった。

・粘土とちがいで一度形をつくるともとに戻せないところも気に入りました。

・カッターナイフで削ることは久しぶりだったので、指が疲れました。

・カッターで木を削る時の音が心地よく、日常とは少し違ったことに集中できた。

・やすりのかけ加減や木の太さなどの違いによって様々なものがあり、作った人の性格が他の活動によるものよりも顕著にでていておもしろいと思ったからです。ひたすらやすりをつけることで木がどんどんきれいになっていくことに喜びを感じた。

・最初の見目は皮がぼろぼろで汚かったのに、削ってみると中は白くてすべすべして、その違いにとっても驚きました。

#### 5. 考察

学生たちは積極的に素材体験に取り組んだ。ふりかえりのコメントからは、感性を刺激されたとの感想もあった。それは二通りの視点からである。ひとつは自身が素材に向き合った時に様々な工夫して新たなアイデアが出た時と、作品鑑賞をして他の学生作品を見て、発見をしたり、その良さに気付いた時である。

素材に向き合った時は、素材と自分自身であるが、作品鑑賞では各々が同一素材と向き合った姿を客観的に見ることができる。自分にはない視点や解釈の姿を見ることで、翻って自分自身を客観的に見るきっかけになった。その後のリアクションペーパーの言葉も、多様でより深い分析をしていた。教員を志す学生は、実習等、児童や生徒との関わりを意識した、授業の展開を想像したコメントも多く、実践したことが具体的な創造力を養うことにつながったと考えられる。

学生が様々な素材に触れることは、多くの思考の機会を作った。手や指で紙、土、石、木を触るだけでなく、はさみで切ったり、ナイフで削ったり、やすりをかけたりなどの道具を介することで、感じる重さや滑らかさ、音や匂いは、写真や映像などを見るだけでは得られない感覚であった。五感のすべてを総動員して得た情報を整理し、考える機会となり新たな創造を生み出す萌芽になりうると手ごたえを感じた。また創造性はひとりの人間から生み出されるものではなく、他者との関わりの中で化学反応のように、つながり変化して浮かび上がるものなのではないかと考える。15回の授業の中で、学生の体験や鑑賞の振り返りの言葉が確実に豊かになっていった。それは素材に触れ、感じて考え、それ整理していく中で、感じることを自分の中で消化して自分自身の言葉に変えていく作業が、捉えどころのないと考えている「感性」について理解を深め、創造性を豊かにしていく姿なのではないか。今

後は、さらに鑑賞する時間を多く設け、言葉を豊かにする素材体験の授業構成も考えていきたい。

#### 参考文献

- ハーバードリード 2001「芸術による教育」  
フィルムアート社  
中村雄二郎 1979「共通感覚論」 岩波書店  
和久洋三 2006「遊びの創造共育法⑥色面の遊びと造形」 玉川大学出版部